

## 教員養成支援の手がかりを求めて II

—平成30年度埼玉県小・中学校初任者研修者へのアンケート調査から—

安原輝彦 埼玉大学教育学部教育実践総合センター

キーワード：埼玉県公立小・中学校初任者（平成30年度）、初任者研修受講前アンケート調査、初任者研修修了後アンケート調査、教職に対する意識、初任者研修期間での悩み等教職支援への手がかり

### 1. はじめに

平成30年度埼玉県公立学校教員採用選考試験（29年度実施）要項によれば、埼玉県教育委員会が求める教師像として、

- 「健康で、明るく、人間性豊かな教師  
（子供をよく理解し、自らも学び続け、子どもとの間に温かい人間関係が築ける人）」
- 「教育に対する情熱と使命感を持つ教師  
（子供に対する愛情と教育者としての責任を持ち、常に子供の立場に立った指導ができる人）」
- 「幅広い教養と専門的な知識・技能を備えた教師  
（幅広い教養と専門的な知識・技能を備え、子供にとってわかりやすい指導ができる人）」  
が示されている。<sup>(註1)</sup>

これらの教師像の原型を探してみると、平成17年10月に示された中央教育審議会答申において示された「新しい時代の義務教育を創造する」の中で、優れた教師の条件について、大きく集約すると以下の3つの要素が重要であると示していることにほぼ合致する。<sup>(註2)</sup>

- ①教職に対する強い情熱：教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感など
- ②教育の専門家としての確かな力量：子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業づくりの力、教材解釈の力など
- ③総合的な人間力：豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質、教職員全体と同僚として協力していくこと

さて、上記3つの優れた教師の条件を受けて埼玉県教育委員会が求める教師像を掲げて実施された平成29年度実施の教員採用試験に合格後、名簿登載に従って964名（小599名、中365名）が小中学校新任教員として、平成30年4月に埼玉県内小中学校へ赴任し、条件付き採用期間での初任者研修に参加するとともに、1年間に及ぶ教員経験を経て、教職の第一歩を踏み出したのである。

本研究は埼玉県内の新採用教員の1年にわたる初任者研修、及び条件付き任用期間を経た時点での、彼ら自身の初任者研修や初任者としての教員経験の振り返りを調査したアンケート結果（平成30年度「埼玉県公立小中学校等初任者研修実施報告」並びに同時に調査した「新採用教員アン

ケート」(安原)の一部と併せて、彼らの振り返りを考察することで、教員養成系大学における教員養成の支援の手掛かりを探ることにある。

## 2. 研究の目的

昨年度(平成29年度)も同様に、埼玉県の初任者研修参加者(平成29年度実施1047名)に、アンケート調査を行い、大学における教員養成課程での教職支援方策への手がかりを求めて、特に「離職」への意識を中心に、教職の第一歩を踏み出した初任者が教職への思いや悩み、職場での経験を探る調査を行った。

この昨年度の研究<sup>(1)</sup>をベースに、今年度も引き続き「離職意識」を中心に据えて調査した。「離職」への意識を抱いた時期はあったものの、初任者研修を終えた者と、反対に、「離職」への意識を持つことなく初任者研修を終えた者との教職生活への思いや悩み、やりがい、などを中心に探った。また、その他、初任者期間を終えるにあたって、教職という仕事を振り返っての思いや教職を目指す後輩(大学生)へのメッセージなどからの示唆を手掛かりに、大学での教職課程での支援の在り方を探るものである。

なお、初任者研修初回(小学校、中学校合同開催)に、「教職への志望時期」、「志望理由」、「教職への不安や心配」についてのアンケートも併せて実施している。<sup>(註3)</sup>

## 3. 先行研究から

小学校教員や中学校教員の初任者に対する意識調査や課題調査に関しては様々な観点からの調査研究がある。

例えば、「小学校初任者教員の現場適応の困難性と教員養成課程で身に付けるべき教師力の意識に関する研究」<sup>(2)</sup>で大前は「現役の小学校教員を対象にアンケートを行うこととし、様々な年齢層の教員に、初任者時代に現場に適応する上でどのようなことに困難さを感じたのかを尋ね、初任者教員の現場への適応に関する困難性の共通点や差異点を明らかにする」調査を行い、「授業、「子どもへの対応」、「学級経営に関するものが、1年目に苦労したことで上位を占め、その結果、大学の教員養成課程において学ぶべき内容もこの三つに関する回答が多く見られた」としている。さらに、「リアリティ・ショックを抱えている新卒教員は少なからずおり、大学において想定していた現場の実態と、実際の学校現場の実態が大きく異なることに戸惑いを覚えている状況が見られる」として、大前は「最近では教育実習だけでなく、インターンシップや、学校ボランティア、…中略…など、様々に学校現場で子どもたちと触れる機会がある」と指摘したうえで、「大学において学校現場に関わる機会が多くなってきているが、現場に関わるという経験だけでなく、実際に自分で「指導を試してみる」経験も用意すべきだと考えられる。現場に出る機会があったとしても、見学しているだけでは、現場の本当の実態はなかなか見えてこないと考えられる」と述べている。また、「自分がうまくいくという想定をしている」指導法が、通用しないという経験を通して、「現場はそこまで甘くはない」、「現場への見通しがまだもてていなかった」ということに気付くきっかけにもなり、そこからまた、「学ばなくてはならない」という意欲も生まれることが考えられる」として、「大学の4年間で様々な場で試行錯誤できる環境を用意し、うまくいかなかったときに、大学教員が助言をするという現場往還型の講義を用意すればよいのだと考えられる」と提案している。

また、佐藤（2018）は当該大学を卒業して教員としてスタートした初任者と初任2年目に対しての調査から、「初任及び2年目において共通して「授業づくり」に関しては「授業の構成」「教材」「子どもの参加」「学習支援」について、課題があることが明らかになった。また、初任と2年目を比較すると初任者の方が自分の実践的指導力に関する認識の低さが明らかになった<sup>(3)</sup>とした研究がある。

一方、初任者研修実施主体である任命権者の調査では、香川県教育委員会が「さぬきの若手教員の実態<sup>(4)</sup>」ということで小学校、中学校、高等学校における若手教員の学級経営に関する意識調査を行っている。この報告書によれば、「初任者の悩み」の上位の3項目は「教材準備の時間が十分にとれない」「休日出勤や残業が多い」「特別な支援が必要な児童生徒への対応が難しい」をあげている。特に、授業準備と特別な支援の2項目の1位は、「(小学校) 授業の流れを考え、発問を考える、(中学校) 授業の流れを考え、補助資料やワークシート等の作成」と「(小中学校とも) 対象児童の指導をしながら、全体指導をすることが難しい」である。学級経営に関する指導の難しさでは、小中学校とも「児童生徒の主体性を育てること」をあげている。

この他、多くの自治体でも初任者の意識調査等を実施しており、初任者研修の研修プログラム開発に生かしたり、学校現場での指導教員や管理職に対しての初任者育成支援の方策を開発している。最近の一例として、「平成28年度文部科学省委託事業『総合的な教師力向上のための調査研究事業』初任者研修の抜本的な改革に関する研究<sup>(5)</sup>」がある。

この報告書の中で、山口県教育委員会が実施した初任者研修において、メンター方式による初任者研修の実施体制の構築、研修内容の工夫を取り入れた初任者研修の研究を行った。研究校として県内小中学校の6校を指定し、初任者を含む若手指導に携わる研修コーディネータ（複数の学校を管轄する）をメンターとして配置し、大きくは以下の3点の研修内容を設定し、各学校の実態に応じて、柔軟に取り組むことを示した。

○ニーズの把握と研修機会の設定（・互いに授業を見合ったりT・Tで授業を行ったりできる時間・環境設定をした。・若手の課題意識を整理分析し、若手によるミニ研修の場の設定を支援した。・ミニ研修の企画を若手に任せ、ニーズに合わせた「リフレッシュ研修」等、柔軟な発想による研修の実施を促した。）

○若手教員や指導教員のサポート・初任者や2・3年次教員の普段の授業をT・Tとしてサポートした。また、朝の会や終わりの会、給食時間など、授業以外について指導した。・初任研の計画立案や後補充の教員との連絡調整を支援したりすることで、学級を担任している指導教員が、初任者の指導に専念できた。）

○効果的な研修についての情報提供・教職大学院の講義や附属学校の研究会等に参加し、それらの取組からの学びを復伝し活用を促した。（・本務校と兼務校の取組について、それぞれの研修内容、方法を提案した。）

各学校からの成果としては、

○メンターチームメンバーの資質向上と若手教員育成への意識の高まり（初任研により、初任者の資質向上が図られることは当然であるが、その他の教員も、初任者のメンターとなることで、教員としての資質が高まった。このことは、全教職員が若手教員の悩みを共有し、全校体制で若手教員を育成する意識を高めることにもつながった。また、若手教員にとっては、多くの先生に見守ってもらっている、という安心感につながった。）

○初任者のニーズに応じた研修の実施(初任者は、様々な課題や悩みを抱えているが、メンターチームメンバーとして日常にかかわっている教員は、初任者の課題・悩みを把握しやすくなる。そして、研修コーディネーターや指導教員が、その課題や悩みに応じて、どの教員をメンターとするかを考え、実際に指導にあたった。このことにより、より効果的な研修を行うことができた。)

○学校の実態に応じた研修方法の選択(研修コーディネーターが、複数の学校にかかわることで、その学校に適した研修の進め方で、初任者を育成することができた。ある方法がA校には適している、B校ではあまり効果的ではない、という実態を踏まえた取組がみられた。)

と報告している。

また、学校現場での初任者の育成という視点から、学校の管理職である校長が自身の初任者時代と比較して現在の初任者に対してどのような見方をしているかをまとめた報告もある。「初任者研修実施についての一考察—初任者研修実施校校長の視点から—」<sup>(6)</sup>で時田(2009)は初任者研修が現在のように機関研修として確立されていなかった時代に初任者を体験した校長たちの多くが、一般論研修、レポート研修以上に、現場での研修(OJT研修)を通じて、子どもたちや同僚教師との触れ合いを重視した実践研修の重要性を述べていることを指摘している。

さらに、大学生に対する教師観に関する調査としては、ベネッセ教育研究所の支援の下で運営されているチャイルド・リサーチ・ネット(CRN)が行った調査「教師観研究報告書」<sup>(7)</sup>がある。

また「大学生の教育観・教職観の形成過程に関する追跡調査研究」<sup>(8)</sup>の調査研究では、「大学に入学し教師をめざそうとする大学生は、どのような教育観や教職への意識、教師や教職のイメージを形成していくのであろうか。教職の専門性の基礎を獲得していくうえで、大学での養成期間は重要な時期である。本論文では、その4年間に、将来教職をめざそうとする学生の教育観、教職への意識、教職イメージあるいは専門的力量的基礎となる諸能力が、どのような要件とプロセスによって形成されていくのかを、追跡的に明らかにしていくことを目的」とした調査を行った結果を報告している。

## 4. 調査対象者の概要

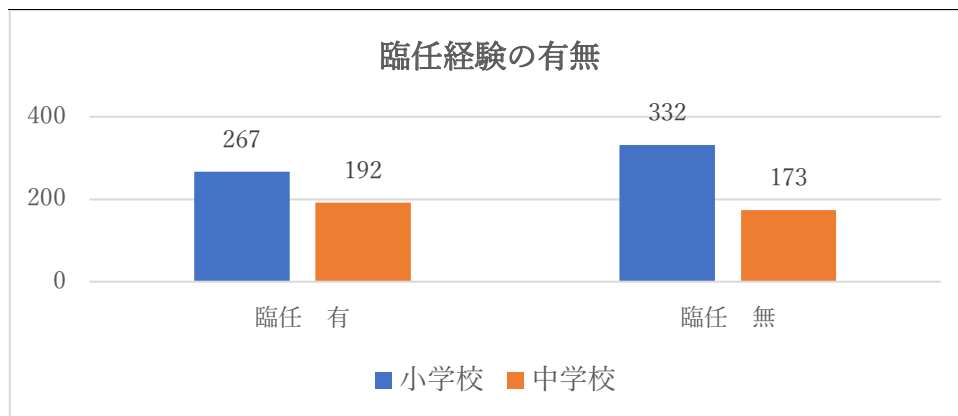
### 4-1 平成30年度埼玉県小中学校初任者教諭の概要

#### (1) 平成30年度校種別初任者研修対象者

	小学校			中学校			合計		
人数	男273	女326	計599	男220	女145	計365	男493	女471	計964

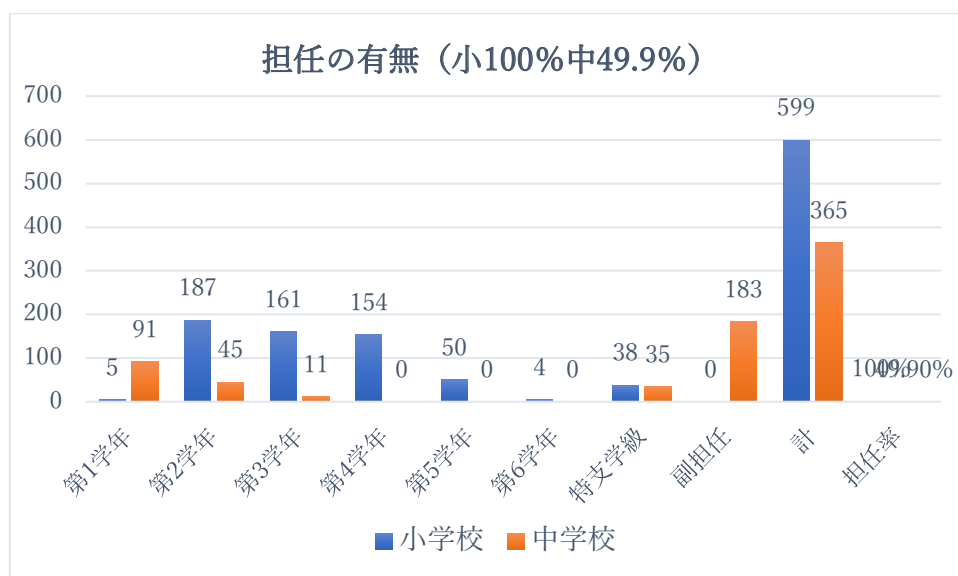
#### (2) 臨時的任用教員等経験者(非常勤講師等は除く)

	小学校	中学校	計
経験者(11か月以上)	267名	192名	479名
臨任率	47.9%	52.6%	49.7%



(3) 担任等の状況

	小学校	中学校
第1学年	5	91
第2学年	187	45
第3学年	161	11
第4学年	154	
第5学年	50	
第6学年	4	
特別支援学級担任	38	35
副担任	0	183
計	599	365
担任率	100%	49.9%



4-2 初任者研修会プログラム

平成30年度の埼玉県小中学校等初任者研修会の研修プログラムは、計15回実施され、例えば、小学校の初任者教諭には、第1回の初回（H30.04.04）には、①今、教師に求められているもの、②服務規律と不祥事の防止、③社会人としてのコミュニケーションマナー、④学級経営の基本と

保護者との連携、⑤教員のためのメンタルヘルス、⑥人事評価制度についてなどの内容が進められ、最終回の15回（H31.01.29～02.07）には、①特別活動の内容と指導の充実・学級活動の時間の展開、②学校の安全と防災、③国際理解教育の意義と実際、④「主体的、対話的で深い学び」の視点からの授業改善といったプログラムで実施された。

なお、小中学校の校種別に研修は実施されるが、プログラムの内容は学習指導、学級経営等で校種の特徴により内容はそれぞれ異なるが、概ね共通の研修プログラムである。

#### 4-3 「新採用教員アンケート」(埼玉大学 安原研究室)

平成30年度の埼玉県小中学校等初任者研修会受講生に対して、初回の4月4日及び最終回（H31.01.29～02.07）の2回にわたってアンケートを実施した。

##### (1) 新採用教員アンケート（2018.04.04実施）

初回の研修会4月4日においては、すでに配置校での各自の校務分掌は受講生全員が校長から拜命されているが、分掌の担当内容については詳しくは把握していないと考えられる。また、入学式、始業式を控えた時期で児童生徒との接触はほとんどない状況である。

主な質問内容は、教職を選択した時期、教職を選択した理由、教職スタートにあたっての不安や心配などについての思いを尋ねたものである。<sup>(註3)</sup>

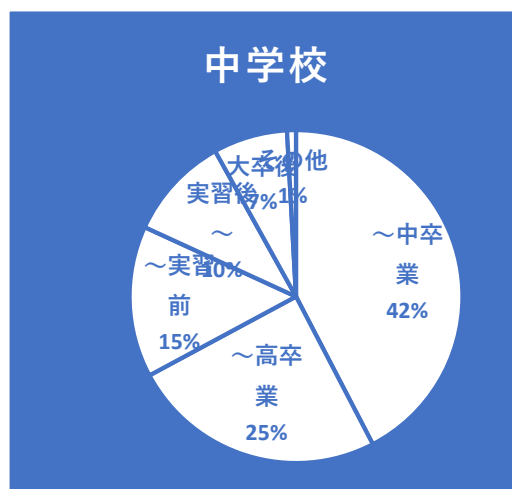
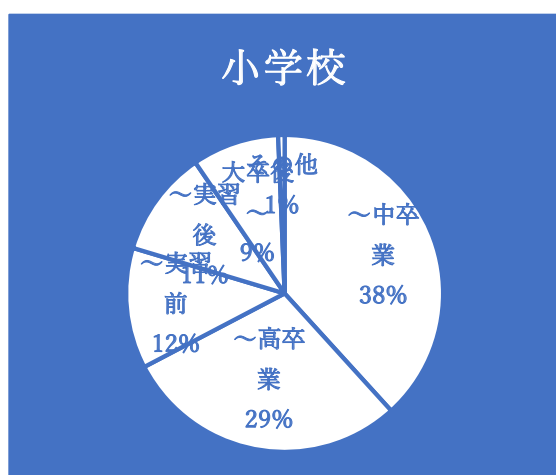
##### (2) 新採用教員アンケート（小学校2019.01.29 2.01 中学校01.31 02.07実施）

平成30年度初任者研修を修了した小中学校教員への教諭に第15回の最終回にて、アンケート調査を実施した。（但し、最終回は小学校、中学校とも2回に分散して実施されたので、アンケート実施もそれぞれの校種で2回に分けて回答を得た。小学校は1/29,2/1、中学校は1/31、2/7に実施）主な質問内容は、教職生活の状況（順調な点、苦勞している点）、離職意識、教職についての思い、教職に就く前と実際に就いてのイメージの違い、教職志望の後輩へのメッセージ等である。<sup>(註4)</sup>

## 5. 調査結果と考察

### 5-1 研修初回調査から（2018.04.04）

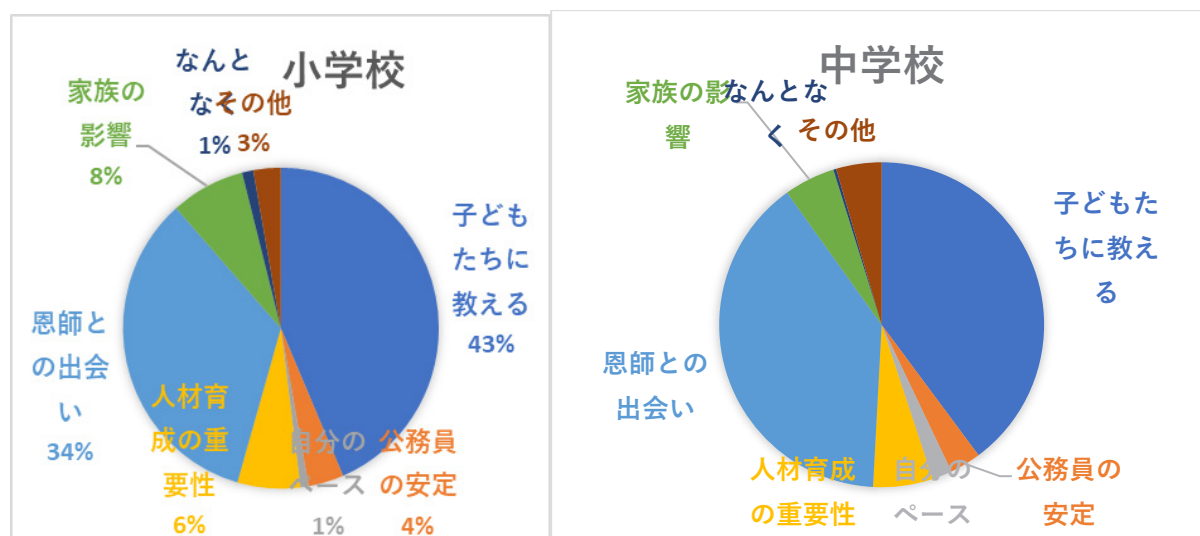
#### (1) あなたが教職に就こうと決断したのはいつですか？



教職に就こうとした時期については、小学校教諭、中学校教諭とも中学校卒業までに進路の方

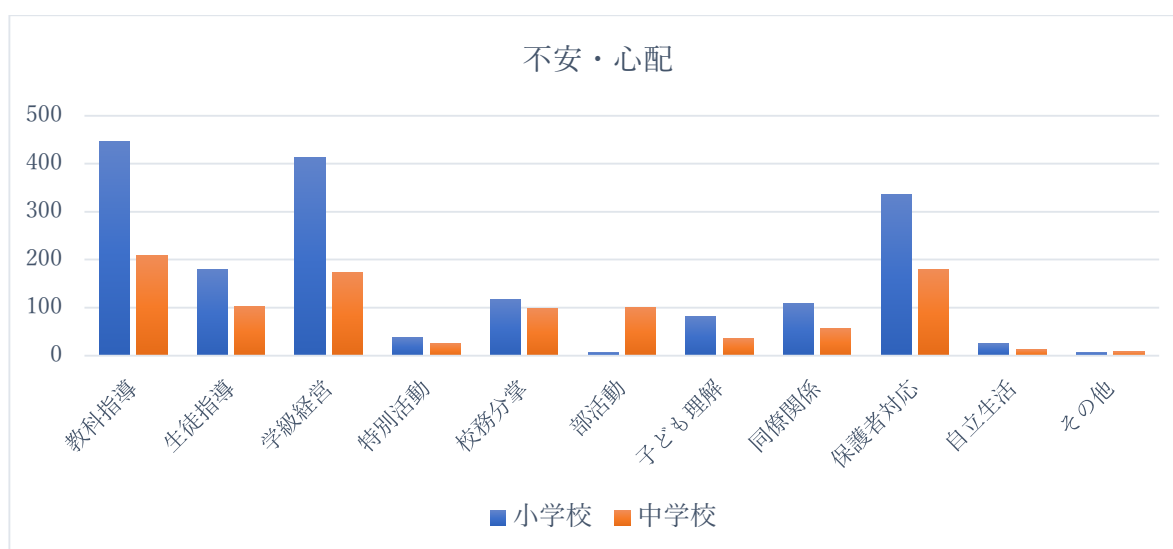
向性を決めている者が多く、7割近くが高校卒業までには教師への進路を決めている。

(2) 仕事として教職を選択した最も強い理由は何か？



この質問に関しては、「子どもたちに教えたり、共に学ぶのが好き」「恩師や素晴らしい先生との出会い」の2項目で小中学校とも75%を超えている。一般企業などへの職業選択と異なって、教職という職業を選択する理由として就職前の職業イメージや就業者のイメージがすでにかかなりの重きをもって存在しているのではないかと考えられる。専門職としての職業イメージを描きやすいのではないかと考えられる。

(3) 初任者としてスタートする上で不安なこと、心配なこと（3つまで複数）

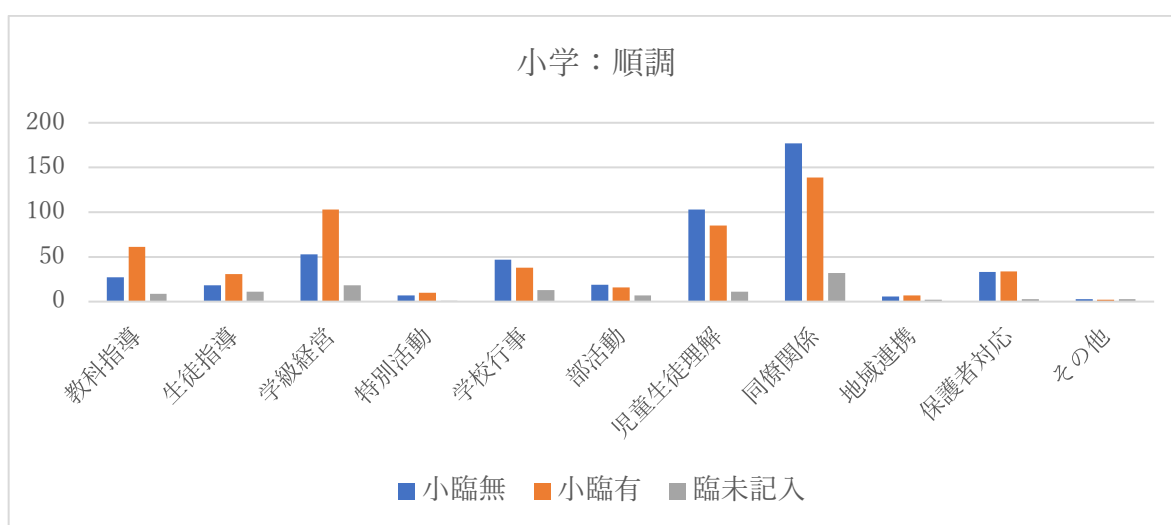


まだ、就職して3日後の研修でのアンケートである。様々な不安や心配を抱えていることは容易に想像できる。小中学校ともに「教科指導」「学級経営」「保護者対応」が上位を占めている。なお、この項目について、臨時的任用教員経験者と未経験者の間で差が目立った項目は、小学校では、「教科指導」（臨任経験が193名、未経験253名）「学級経営」（臨任経験が174名、未経験239名）「教

員同士の人間関係」(臨任経験が80名、未経験37名)、また、中学校は「生活生徒指導」(臨任経験が65名、未経験38名)、「生活生徒指導」(臨任経験が116名、未経験77名)という結果で差が出ていた。総じて小学校教員では「教科指導」「学級経営」に関しては未経験者の方が臨任経験者よりも心配し、「教員同士の人間関係」では臨任経験者の方が心配の度合いは高いようである。中学校に関しては、「学級経営」「生活生徒指導」に関しては臨任経験者の方が心配の度合いは高い結果となっている。

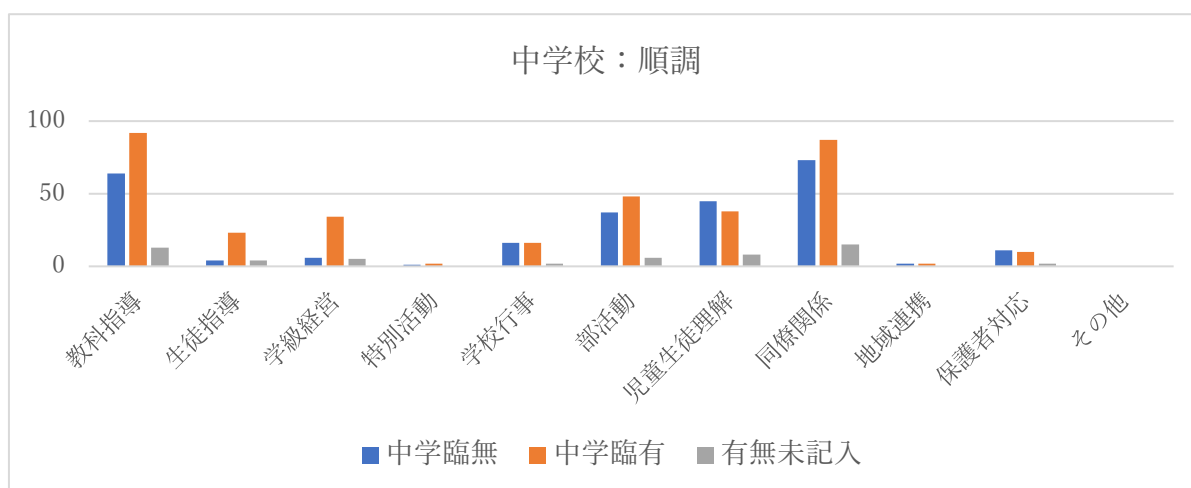
## 5-2 研修終了後の調査から (小学校2019.01.29 2.01 中学校01.31 02.07実施)

(1) 質問項目1. での「5」、「この1年間の教職生活で順調であると感じる項目を上位2つ選んでください。」と尋ね、「6」では「この1年間の教職生活で苦勞している、悩んでいると感じる項目を上位2つ選んでください。」と尋ねた。



小学校の初任者全体では、順調である項目として「教員同士の人間関係」「児童生徒理解」が多く挙げられている。

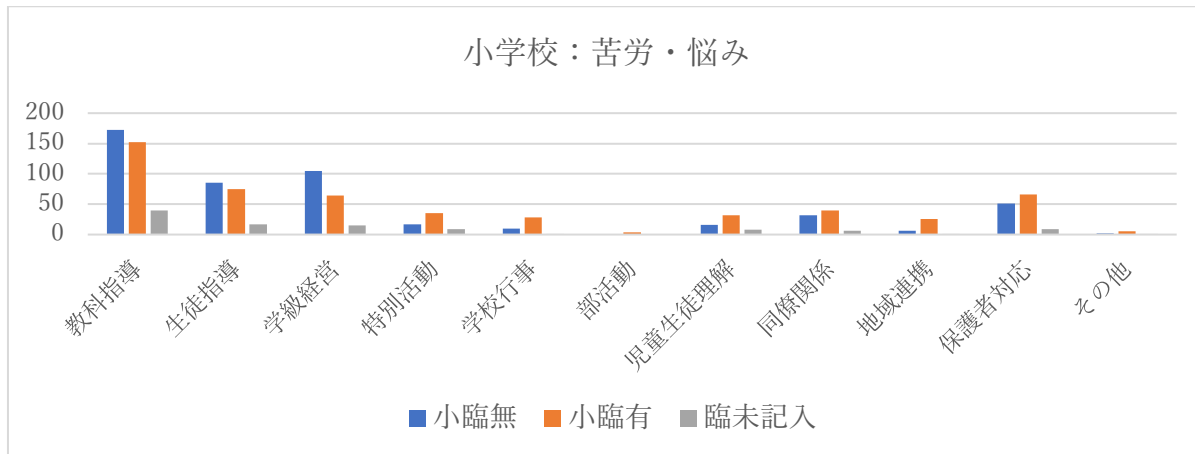
「教科の指導」と「学級経営」に関しては臨時的任用経験が有る者の方が経験がない者よりも順調である割合が高い。



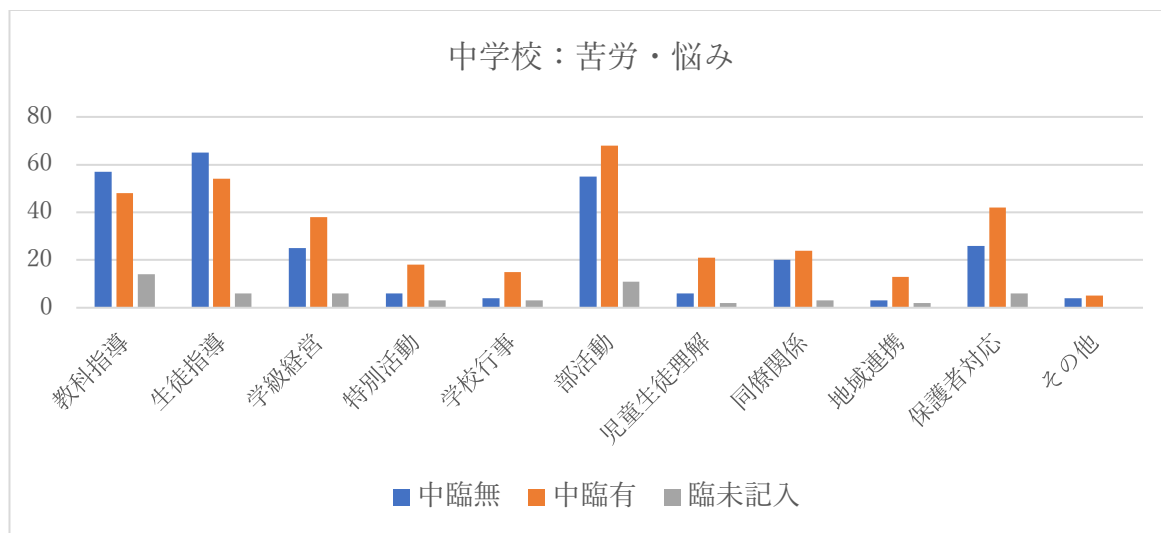


中学校の初任者全体では、順調である項目として、「教科の指導」「教員同士の人間関係」が多く挙げられている。

「教科の指導」「生徒指導」「学級経営」に関しては臨時的任用経験が有る者の方が経験がない者よりも順調である割合が高い。



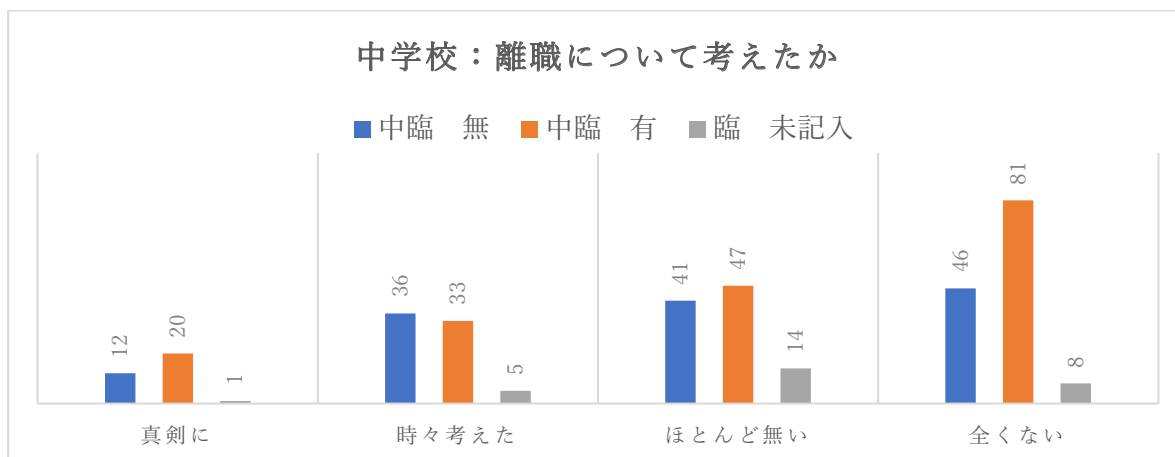
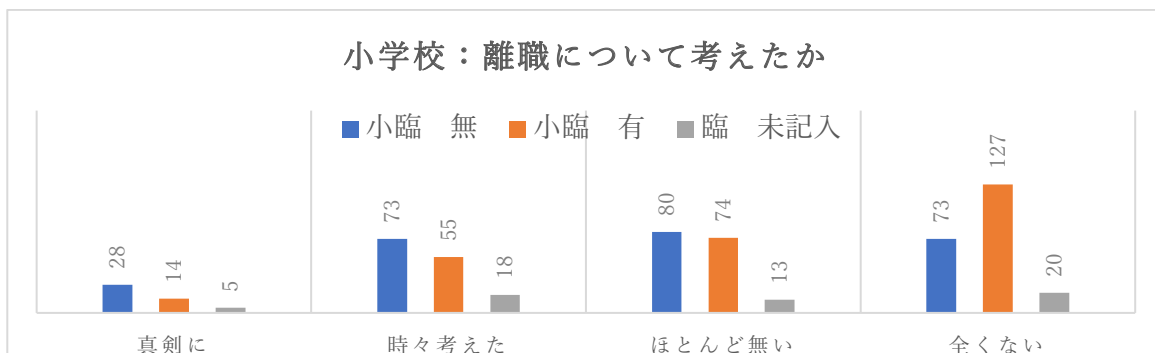
小学校教諭においては「教科指導」「生徒指導」「学級経営」について苦勞や悩みを感じている初任者が特に多く、また何れも臨時的任用経験がない者の方が有る者よりも苦勞している、悩んでいると感じている者が多い。一方、この3つの項目以外の項目については、それほど数としての差はないが、臨時的任用教員の経験のある者の方が苦勞や悩みを感じている人数は多くなっている。



中学校教諭においては、「教科指導」「生徒指導」「部活動」の3つの項目が特に数としては多く、苦勞や悩みとして回答している。続いて、「保護者対応」「学級経営」で苦勞していることをあげる者の数が多かった。小学校同様「教科指導」「生徒指導」については臨時的任用経験がない者の方が有る者よりも苦勞している、悩んでいると感じている数は多い。

(2)質問事項2の「7」では、「採用から初任者研修修了までの間に、教職を離れる（離職）について考えたことがありましたか。」と尋ねた。

小学校教員では、599名のうち47名（7.8%）、中学校教員では365名のうち33名（9%）の者



が離職について「真剣に考えた」ことがあると回答している。

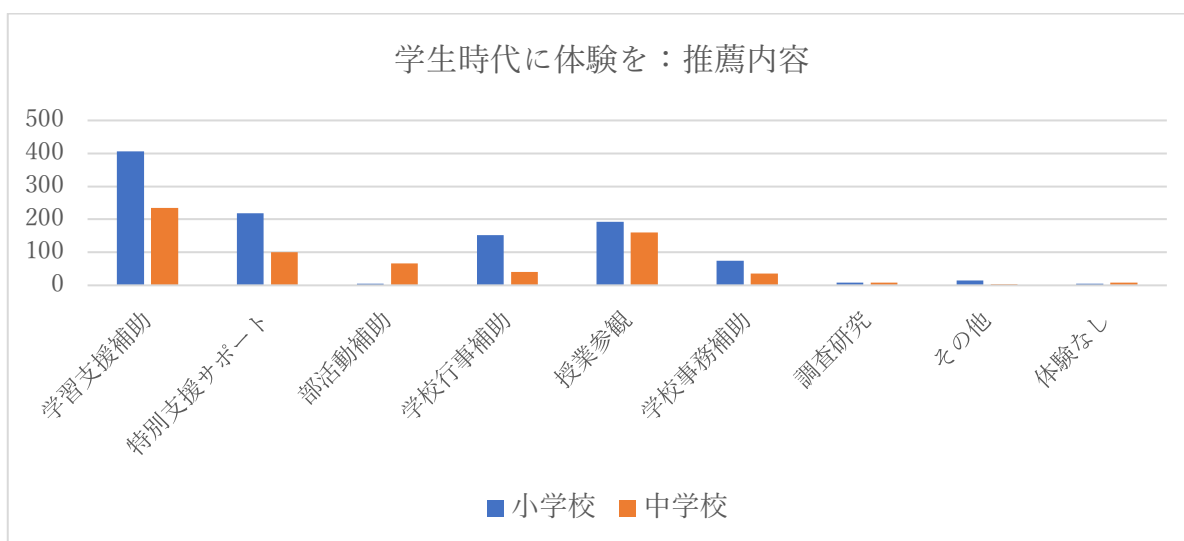
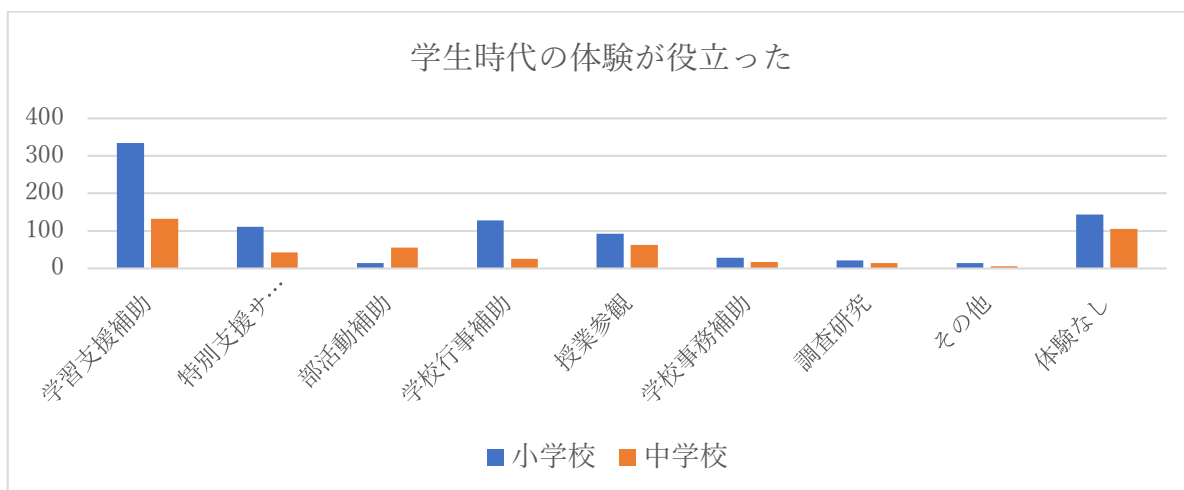
臨時的任用経験の有無が「離職について考えたか」とどの程度の間接性があるのか比較したが、小学校教員は経験無の者が経験有の2倍となっている一方で、中学校教員では経験有の者が無い者の1.6倍を示している。小中学校とも臨時的任用教員の割合はほぼ半数であることから、職種によって、人数の割合にそれほど差はないように思われるが、小中で結果が反対となる要因はわからない。通常であれば、臨時的任用として勤務経験がある方が教職経験後に採用されたのであるから「離職を真剣に考えた」数は少なくなると考えられる。敢えてこの結果の背景を推測してみれば、臨時的任用で経験した学校に比較して、初任者として配置された現在の学校の状況が厳しいと感じる者が多いと考えられるかもしれない。

(2)―②この「7」の質問に続いて「8」「9」の質問で、離職を「真剣に考えた」「時々考えた」と回答した者には「離職せずに教職を継続することができた要因は何か」について自由に記述してもらい、反対に、離職について考えたことが「ほとんど無い」「全くない」者については、「離職について考えるまでに至らずにいた要因は何か」について自由に記述してもらった。ここでは、特に、「真剣に考えた」者の記述をキーワードでまとめた形で取りあげた。(小中学校の合計80名)

- ・家族や先輩、指導教員など周りの同僚のサポート、支援。など19名
- ・世間体を考えた。世話になった人に申し訳ない。迷惑がかかる。など8名
- ・生活が懸かっている。高収入である。福利厚生を考えると。など7名
- ・子どもたちへの責任感。原因が子供たちではなかったと気付いたから。子どもたちとの交流。など6名

- ・今も考えている。継続して離職を考えている。決心がつかないまま。など6名
  - ・とにかく3年は続けようと思っている。途中で投げ出せない。など5名
  - ・他の職のことを考える余裕もない。ほかに適職が見つからない。など5名
  - ・やめたいが他に就きたい仕事も見つからない。他の職を探している。など4名
  - ・とにかく年度が終わるまではやめられない。など3名
  - ・責任感を放棄したくないという思い。子どもたちに迷惑がかかる。など3名
  - ・子どもたちの笑顔と変容が見られたので。など2名
  - ・臨任期間が長くせつかく合格したから。子どもたちの卒業を楽しみにしている。など2名
  - ・せつかく合格したので、やれるところまでやってみる。など2名
  - ・教員以外の友人や知人に相談して。 1名
- 
- ・わからない。 2名
  - ・記入なし。 3名
  - ・その他 2名

(3) 質問項目4の「10」「11」では「大学時代に体験したことで、教職に就いて役立ったと思う



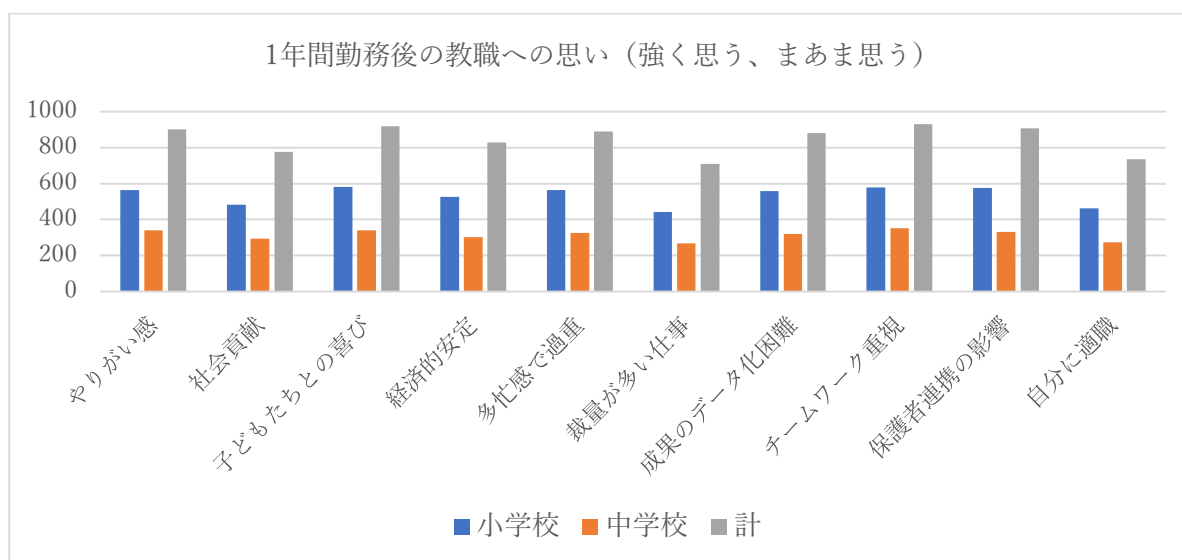
もの」と「学生時代に薦めたい体験」をそれぞれ2つまで記入してもらった。

小中学校ともに、大学時代での学校現場での体験（ボランティア等）で、教職に追って役に立ったと考えられるものとしては、学習支援や学習補助の体験をあげる者が多かった。また、学生時代に学校現場での体験（ボランティア等）を経験していない者も小学校教員で154名（25.7%）、中学校教員で106名（29.0%）いた。

にもかかわらず、「体験の有無にかかわらず、1年間の勤務を踏まえ、教職を目指す学生に、大学時代に薦めたい経験を2つまで記入してください」との質問には、ほとんどの者が学校現場での体験（ボランティア等）、特に、「学習支援や学習補助」「特別支援教育や障害児のサポート」「研究授業等の授業参観」を薦めており、「体験なし」を示唆した者は小中学校あわせても13名しかいなかった。

(4)―①質問項目5.の「12」～「21」では「1年間の勤務を通じての教職という仕事についての思い」についての質問である。

ここでは、それぞれ4段階「A：強く思う B：まあ思う C：あまり思わない D：全く思わない」の程度で問いかけたが、特に「A：強く思う」「B：まあ思う」の合計を集計した。

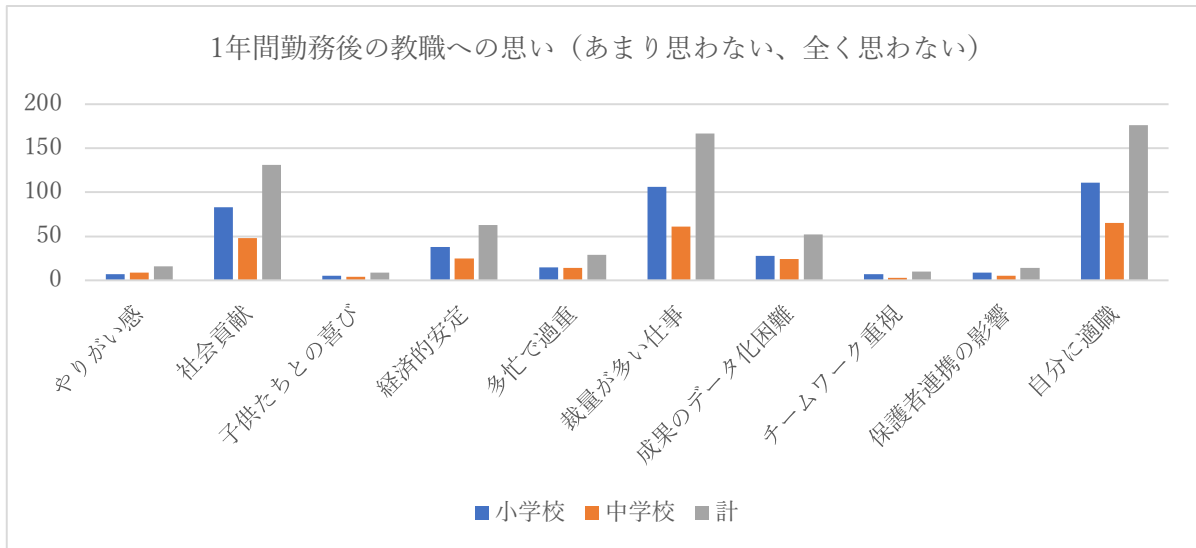


「仕事は過重で、かなり多忙な仕事である」と思う者が小中学校合わせて890名（92%）いるが、その一方で、「やりがいを感じる仕事である」（94%）「社会に貢献していると感じられる仕事」（81%）「教職は自分に合っていると思われる仕事」（76%）と教職に就いて1年間勤務した後に肯定的にとらえている。

ところで、何かと社会で話題になる収入に関する思いとして、多忙で過重な労働環境で収入が見合わないマスコミ報道などでは話題になるが、実際は高収入であると「強く思う、まあ思う」と感じている者が86%いることをどう考えたらいいのだろうか。

(4)―② 同様に「1年間の勤務を通じての教職という仕事についての思い」についての質問であるがここでは、特にそれぞれ4段階の「C：あまり思わない D：全く思わない」の合計を集計した。

結果であるが、「社会に貢献していると感じられる仕事」（14.3%）「自分なりのペースや方法な



ど自分の裁量行う範囲が比較的に多い仕事」(21.8%)「教職は自分に合っていると思われる仕事である」(19.7%)を選んだものが比較的多かった。一方で、気に懸かるのは「教職は自分に合っていると思われる仕事である」という質問に対して19.7%の者が「あまり思わない、全く思わない」と回答していることである。そこで、この中で「全く思わない」と回答した割合は1.5%の14名だった。1.5%とはいえこの14名には留意していく必要があるかもしれない。

(5) 最後に質問項目の5.の「22」で「大学時代（民間企業等で教職に就く以前）に考えていた教員や学校のイメージと、実際に教員として勤務しての教員や学校の実態で大きく異なると感じること何ですか。自由に記入してください。」

及び「教職を目指す後輩となる大学生に、まもなく教職1年目を終える先輩として、大学時代にどんな学びや準備をすればよいのかをメッセージとして記入ください。」

の2問の自由記述で回答を求めた。ここでは離職について「真剣に考えた」と回答した者が記述した内容を取り上げることにした。（自由記述であるため、複数回答、無記入の者も含む）

- ①「大学時代（民間企業等で教職に就く以前）に考えていた教員や学校のイメージと、実際に教員として勤務しての教員や学校の実態で大きく異なると感じること何ですか。自由に記入してください。」（「離職を真剣に考えた者」より）

【小学校】記述者／回答者 43名／47名 複数回答集計

イメージギャップの内容	人数
業務量 多忙 時間不足 など業務の多忙感に関するものなど	25
児童生徒理解など子どもとの人間関係に関するものなど	10
職場の同僚教員との人間関係に関するものなど	14
学校環境、施設設備に関するものなど	0
家庭や保護者、地域とのかかわりに関するものなど	4
学校運営、管理運営など管理職の職務に関するもの	4
教師としての資質、能力に関するもの	0
その他	2

【中学校】記述者／回答者 30／33名 複数回答集計

イメージギャップの内容	人 数
業務量 多忙 時間不足 など業務の多忙感に関するものなど	15
児童生徒理解など子どもとの人間関係に関するものなど	6
職場の同僚教員との人間関係に関するものなど	6
学校環境、施設設備に関するものなど	1
家庭や保護者、地域とのかかわりに関するものなど	2
学校運営、管理運営など管理職の職務に関するもの	1
教師としての資質、能力に関するもの	0
その他	4

- ②「教職を目指す後輩となる大学生に、まもなく教職1年目を終える先輩として、大学時代にどんな学びや準備をすればよいのかをメッセージとして記入ください。」(離職を真剣に考えた者)

【小学校】記述者／回答者 43名／47名 複数回答集計

メッセージ	人 数
学校の実態を経験 学校ボランティアに参加する 教員から話を聞く	10
子ども理解 子どもという存在について子どもと接する機会を持つ	5
教育だけでなく広く学習しておく。教育以外の分野の学習も	8
一般常識 社会人としてのマナー 保護者対応の準備	3
趣味をもつ 旅行に行く しっかり遊ぶ 見聞を広めておく	12
いろいろな世代や他の業界の人とできる限り交流を持つ 人間関係を広める	9
激務に耐える体力と精神力をつける 規則正しい生活リズム	4
ICTやPCを使いこなせるように	1
覚悟できる 自覚する 省察できる といった冷静な態度を鍛えておく	6
アルバイトなどで他の職場について体験しておく	1
貧困の格差や学力の格差の実態について勉強しておく 人権問題への関心	0
特別支援教育や発達障害などの勉強	2
その他	3

【中学校】記述者／回答者 30／33名 複数回答集計

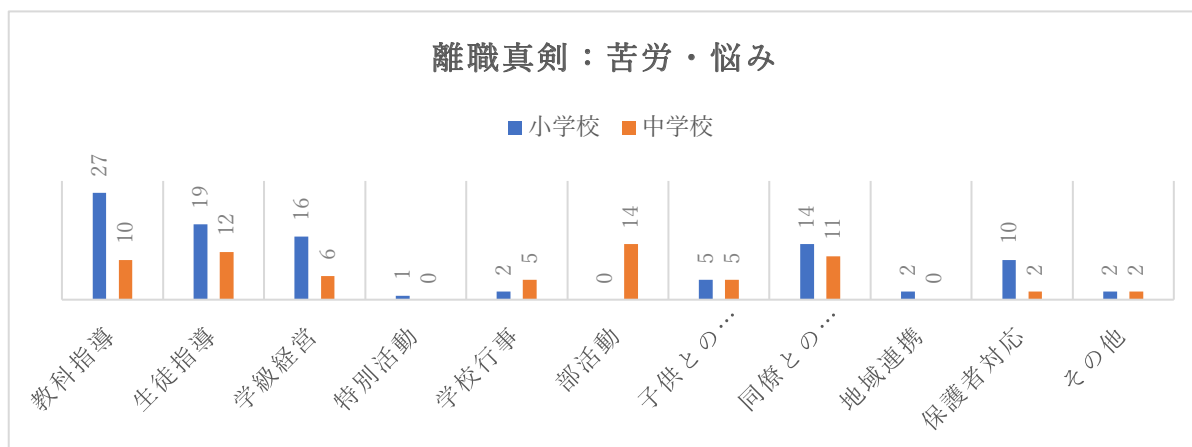
メッセージ	人 数
学校の実態を経験 学校ボランティアに参加する 教員から話を聞く	7
子ども理解 子どもという存在について子どもと接する機会を持つ	2
教育だけでなく広く学習しておく。教育以外の分野の学習も	6
一般常識 社会人としてのマナー 保護者対応の準備	2
趣味をもつ 旅行に行く しっかり遊ぶ 見聞を広めておく	4
いろいろな世代や他の業界の人とできる限り交流を持つ 人間関係を広める	6
激務に耐える体力と精神力をつける 規則正しい生活リズム	3
ICTやPCを使いこなせるように	0
覚悟できる 自覚する 省察できる といった冷静な態度を鍛えておく	6
アルバイトなどで他の職場について体験しておく	3
貧困の格差や学力の格差の実態について勉強しておく 人権問題への関心	0
特別支援教育や発達障害などの勉強	0
その他	2

## 6. 離職意識と教職生活

ここでは「離職について真剣に考えた」者と「離職について全く考えなかった者」の双方に対して「教職生活で苦勞している、悩んでいる」事項との関連を調べてみた。

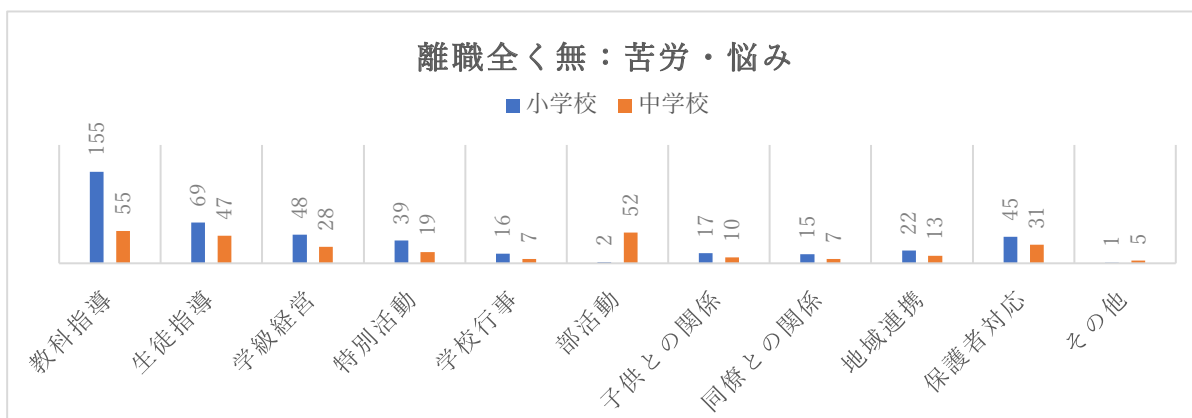
(1) 「離職について真剣に考えた」者が「教職生活で苦勞している、悩んでいる」事項

小学校 47名×2 母数94 中学校 33名×2 母数66



(2) 「離職を全く考えなかった」者が「教職生活で苦勞している、悩んでいる」事項

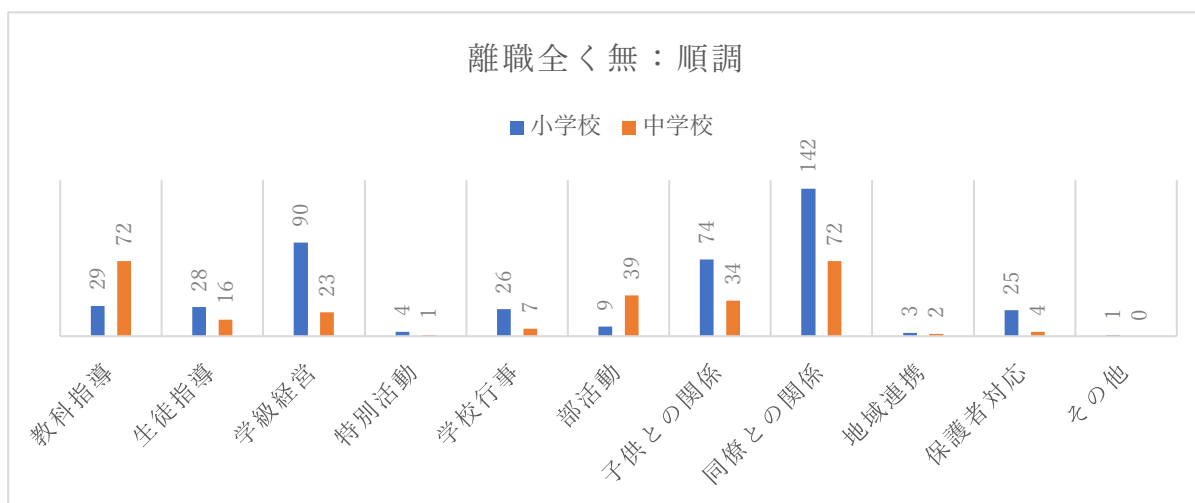
小学校 220名×2 母数440 中学校 131名×2 母数262



(3) 「離職を全く考えなかった」者が「教職生活で順調である」事項

小学校 220名×2 母数440

中学校 131名×2 母数262

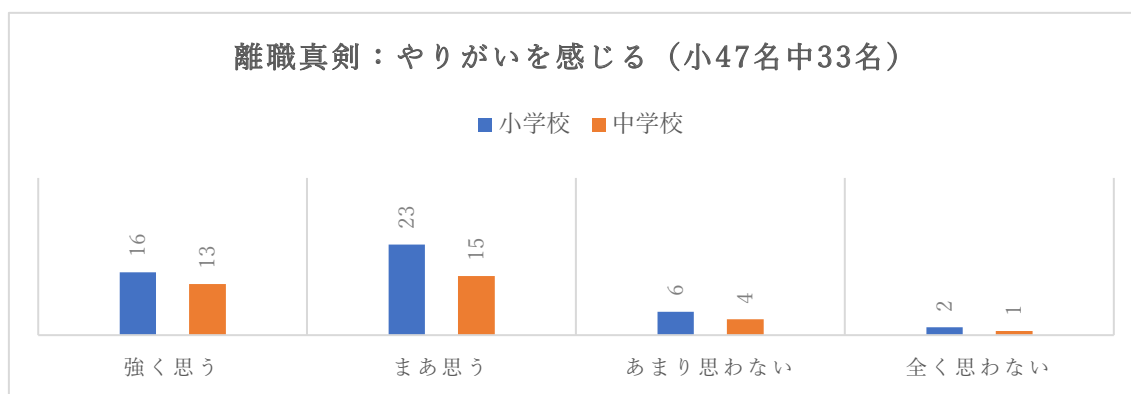


\* 「離職について真剣に考えた」者が「教員同士の人間関係」が「順調である」を上位2項目で回答した数は小学校で18/94 (19%)、中学校では6/66 (9%)であった。

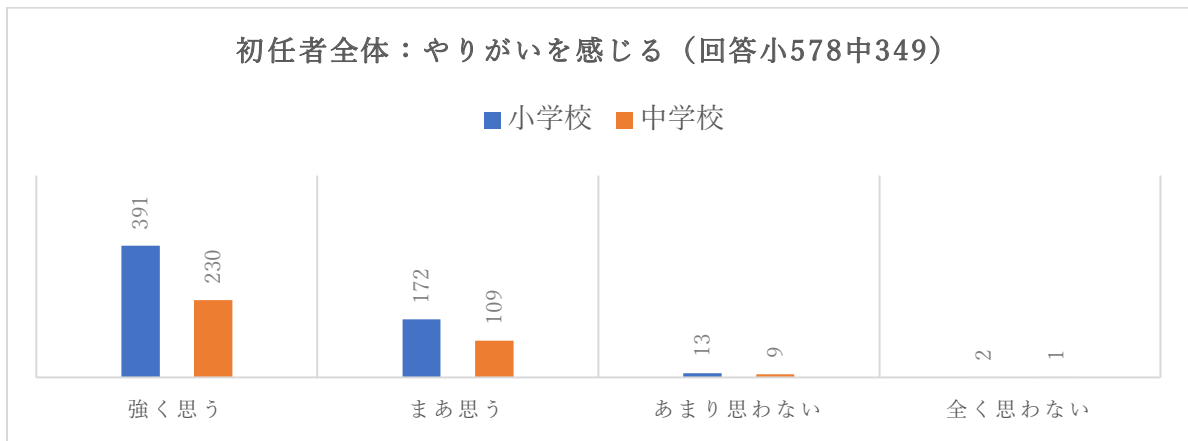
まずは(1)と(2)の結果をみると、「離職について真剣に考えた」者と「離職を全く考えなかった」者の間で大きく結果が異なったのは「同僚との人間関係」である。「離職について真剣に考えた」者が「同僚との人間関係」を苦勞や悩みとして回答した者が小学校で14/94 (14.8%)、中学校で11/66 (16.7%)であったのに対して、「離職を全く考えなかった」者が「同僚との人間関係」を苦勞や悩みであると回答したのは、小学校で15/440 (0.3%)であった。

さらに、「同僚との人間関係」が順調であると回答した結果を比較すれば、「離職について真剣に考えた」者が「同僚との人間関係」が順調であるを上位2項目に回答した者は小学校で18/94 (19%)、中学校で6/66 (9%)であったのに対して、「離職を全く考えなかった」者は小学校で142/440 (32.3%)、中学校で72/262 (27.5%)が「同僚との人間関係」が順調であると回答している。

(4)初任者として、1年間の勤務を通じての教職という仕事についての思いを尋ねた質問のうち、「やりがいを感じる仕事である」の質問について初任者全体では、回答数927名のうち、621名が「強く思う」と回答し、割合にして67%である。







一方、教職にやりがいを全く感じないと回答したのはすべて「離職を真剣に考えた者」であり割合は80名中（小中合計）の3名だけであった。0.4%であった。

## 7. 今後の教職支援についての手ごかり

### (1) イメージギャップとメッセージから

「離職を真剣に考えた者」を対象に6の(5)では以下①②の自由記述に関して、いくつかに分類して回答項目の比較をしたが、ここでは以下の①と②の質問で、同一人物がどのように記述しているかを複数例（同様の内容については割愛）取り上げて、今後の教職支援の手ごかりを考えてみたい。

実際に1年間勤務して、教職に就く前のイメージと実際に就職後に感じたギャップを記述するとともに、教職を目指す後輩の大学生へのアドバイスとしてどんなメッセージを記述するのか、自分が感じたイメージのギャップを踏まえて、後輩へのアドバイスが書かれているのではないかと考えたからである。なお、性別、臨時的任用の有無、年齢については明記する。

- ①「大学時代（民間企業等で教職に就く以前）に考えていた教員や学校のイメージと、実際に教員として勤務しての教員や学校の実態で大きく異なると感じることは何ですか。自由に記入してください。」
- ②「教職を目指す後輩となる大学生に、まもなく教職1年目を終える先輩として、大学時代にどんな学びや準備をすればよいのかをメッセージとして記入ください。」

#### 【小学校】具体的な記述内容

- ・①「児童が予想していた以上に幼く感じた。特別な支援を要する児童が多い」  
→②「実際に児童とふれあい、発達段階を肌で感じ取ることがとても大切だと思います」  
（女・臨無 22歳）
- ・①「大学時代に思っていたよりもはるかに大変だと思うことが多く、自分の学級に関する以外での仕事がかかなり多いと感じた。また、学校や学年で統一していかなければならないことが多いことに驚いた」  
→②「大学時代に教育書をたくさん読んだが、児童の実態によって大きく異なるので、やはり様々な学校に行って実態を見て学ぶことが一番大切だと感じた。通常学級のみならず特別支援学級

- へも積極的に行くことが多様な児童を理解するために大切だと思う」 (女・臨無 23歳)
- ・①「仕事の内容が多すぎる。もっと子供や授業のことを考えることができると思っていた。…中略…時間にも厳しい」
    - ②「大学時代には勉強だけでなく、今だからこそできる様々なジャンルを経験して子供たちにエピソードを話すことができる先生になってほしい」 (女・臨無 23歳)
  - ・①「子供の実態や学級経営の難しさ」
    - ②「まずはボランティア等で実際に学校現場を体験すること」 (女・臨無 23歳)
  - ・①やりがいや児童の成長がエネルギーになると思っていたが、実際はそれ以上に疲労や悩みが多く乗り越えるのがつらい」
    - ②「現場をたくさん見て、現場の生の声（教員、児童、地域）を聞いた方がいいと思います」 (女・臨無 23歳)
  - ・①「思っていた以上に様々な仕事があり、かつ、多忙で全然心の余裕がないまま日々を過ごすことになったこと」
    - ②「人前で話す練習をする。パソコンを自在に使えるようにする。身近に相談できる人を多く持つておく」 (男・臨無 23歳)
  - ・①「担任はもっとクラスに集中するものかと思いましたが、様々な校務分掌により実際はなかなか時間が取れないことも初めて知りました」
    - ②「教科指導の知識ももちろん非常に重要ではありますが、とにかく自分自身が様々なこと（スポーツ、芸術）に挑戦したり、様々な場所を訪れたりして経験をすることを正しく判断し、自分の糧とするため必要な知識を身に付けることができればよいと思います」 (男・臨無 24歳)
  - ・①「子供がかわいい、好きということだけではやっていけない仕事だと思った。」
    - ②「覚悟した方がよい。社会人になるのは大変」 (女・臨無 23歳)
  - ・①「想像以上の仕事量と忙しさ。できた時の子供たちの笑顔の教員としてのうれしさ」
    - ②「たくさん遊んで子供たちに話せることを増やした方がよい」 (女・臨無 24歳)
  - ・①「放課後にすべき仕事が多すぎる。学年の仕事や会議、研修、部会が毎日のように合って、初任者はさらに公開授業や研究授業の準備や協議会もあり、…中略…また、学年で足並みをそろえなくてはならないことが多くて、自分が学級でやりたいと思っていたことや掲示物など自由にできないこと」
    - ②「自分が本当に信頼でき、相談すると親身になってくれる友人、恋人、人生の先輩を持ってください。しんどい時、吐き出したものを受け止めてくれる人がいるだけで、また立ち上がれる勇気が出ます。また、どんなに本を読んでもボランティアに行っても、働かないとわからないことが多々あります。人脈を広げたり大きなチャレンジをしたりして、成功だけでなく、失敗もたくさんして精神を鍛えてください。何かを乗り越えた経験があれば、私はまだできる！と持ちこたえることもできると思います。最後は子供たちが助けてくれることもあります。先生という仕事に夢を持ってほしいです」 (女・臨無 23歳)
  - ・①「教員同士が協力し合う職業だと思っていたが、協力し合うのではなく個が強かった」
    - ②「遊ぶ時間が無くなるので、たくさん遊び好きなことを学ぶこと」 (女・臨無 23歳)
  - ・①「チーム学校とよく聞いていたし、形が取られていると言われていたが、実際は個人プレーであることがほとんど（学校によるかもしれませんが）。保護者からの要求が多すぎる。また、介入しすぎるために児童の指導ができない」

- ②「記入無し」 (女・臨無 22歳)
- ・①「イメージよりもはるかに学力が低かったり、生徒指導の面で問題があったりと子どもにはいろいろな子がいること。また、病気休暇に入る先生がとても多いこと」  
→②「実習校等にボランティアで行かせていただき、卒業式等の行事に参加させてもらうと、教育実習では学べないことが学べます。また、子供にいろいろな経験を話せるように、今ある時間でいろいろなことを体験するといいいかなと思います」 (女・臨無 22歳)
  - ・①「子どもは授業を集中して受ける、互いに協力するなどが当たり前だと思っていたが、実態は当たり前ではない」  
→②「特別な支援や配慮を要する児童への対応を学んでおくべきだと思います」 (女・臨無 23歳)
  - ・①「予想していたが、閉鎖的、考えが古く柔軟性に欠ける。新しいことは好まず、現状維持を好む。右へならえで閉鎖的、こんなにも尊敬できる人が少ないとは思わなかった。思考停止状態でルールに縛られている子が多い」  
→②「多くの考えに触れ、行動し、体験すること、人としての幅を広げてほしい」 (男・臨有 33歳)
  - ・①「児童や保護者対応が一番大変だと思っていたが、共に働く教員のコミュニケーションが一番大事だと感じる。職場の雰囲気がいいとつらいことも乗り越えられる」  
→②「広い人間関係を築いた方がよいと思います」 (女・臨有 32歳)
  - ・①「教員の中には時間にルーズな方が多く、特に小学校では「みんなで一緒に」という考えが良くも悪くも強いと感じた。また、個を認め合うことを教える立場の人間であるのに、それができない人が多いと感じた」  
→②「本当に激務です。親との連携を図るのも大事だし、何より担任以外の業務や他の教員とうまくやっていく力がとても大切です。人間関係で悩むことの方がよっぽど多いです。そういう職だという覚悟をしておくことが一番お準備です」 (女・臨有 25歳)
  - ・①「個人の仕事の要領の良さが大事である。やりたいことがたくさんあっても時間が足りず追いつかない。子供に対する仕事より、事務仕事が多い。」  
→②「長期の旅行に出かけるなど。恩師に会いに行く。教育実習校に継続的にボランティアに行くこと」 (女・臨有 25歳)
  - ・①「授業以外の仕事が多く、教材研究に力を入れている余裕はありません。管理職からのパワハラ、セクハラも存在します。土日仕事です」  
→②「各教科によって指導案の形式は異なるので勉強しておくといいいと思います」 (女・臨有 26歳)

### 【中学校】具体的な記述内容

- ・①「教員同士の仲が悪い。昔からのしきたりが強く、不要な仕事が多い。子供の悪口をよく言っている」  
→②「教材研究をして、今から授業を作っておくとよい」 (男・臨無 24歳)
- ・①「部活動よっての負担に差がある。好きな部活動ができない」  
→②「いろいろなスポーツをやろう」 (男・臨無 22歳)
- ・①「子どもたちとの日々が好きでしたし、なってみたいと思っていましたが、いざ現場に入って

みると、生徒との距離感、信頼関係の構築の難しさもあり、正直子供が好きでなくなった時期もありました。」

→②「常に見据えて準備してください。現実に対応するためにも頑張ってください。教育現場に足を踏み入れるといいと思います。」 (男・臨無 24歳)

- ・①「保護者の介入、クレームが多い。教員も人間なのに、一つミスも間違いも許されないと  
思わされた。子供よりも親の理解が0。要求することばかりを当たり前だと思っている。」

→②「忙しさや離職の理由をしっかりと知らせておくべき。心の準備が必要。強くしなやかな  
心が大切」 (女・臨無 23歳)

- ・①「行事などの準備で、こんなにも教員が裏でいろいろとやっているんだと思った。思っていた  
よりもずっとブラックだった。」

→②「様々な場所へ足を運び、体験し、何かを語れる準備をしておくこと」 (女・臨無 23歳)

- ・①「教職に就ける程の教育を受けてきた人にとっては、中学校3年生でも信じられないくらい読  
み書きや一般的な知識を持っていないこと。(保護者も含めて)。また、保護者の意見が世のイメ  
ージのモンスターペアレントとは全く違うズレ方をしていた」

→②「教員採用試験に受かること。臨時的任用教員は部活や教科指導についての長期的な見通  
しが立たない。基本的な日常生活を送るために必要な知識を教える手法を身に付けておくこと」

(男・臨無 29歳)

- ・①「勉強を教えることがメインかと思いきや事務が多く驚愕した」

→②「記入無し」

(男・臨無 25歳)

- ・①「個人の力量が試される職業で、個人の責任がとても重いと感じました。また、授業以外の  
仕事がたくさんあり、教材研究の時間がなかなか取れないと感じています。」

→②「専門教科の教材研究を進めておいた方がよいと思います」 (女・臨無 23歳)

- ・①「先輩教員に指導方法を強制される。部活動の休みが念い30日ほどしかなく、休めない。」

→②「学校内で行われているボランティア等に積極的に参加し、学校という職場に慣れておく  
ことを強く勧めます。4月1日から急に教員になると不安で仕方ない」 (男・臨無 23歳)

- ・①「①保護者が子供と同じ目線で物事を考えているため、協力連携がしづらい(非常識な保護  
者が多い) ②人員が不足しすぎている。教材研究の時間がない。授業が片手間になっている。  
③部活動の活動日が多すぎる。また、物事が部活動中心に考えられすぎている」

→②「教科について専門知識があるということは当然で、そのうえで子供に分かりやすく教える  
という経験が必要。塾などのアルバイトはしておくことよい。同時に大学の授業はきちんと受ける」

(女・臨無 25歳)

- ・①「学校によりカラーが違うこと」

→②「様々なことを体験、経験しておくことがよいと思います」

(女・臨有 25歳)

- ・①「教員はとても狭い世界で生きており、視野と見識がとても狭い。教職の勉強も必要だが、  
他分野も勉強し、経験して人間性を高めていく必要がある。」

→②「たくさん経験して、広い視野で社会を見ることができるといい人間になってほしい。」

(男・臨有 33歳)

- ・①「授業だけでなく、学級内、部活動等の関りから様々な問題を抱えた生徒と接する中でこ  
ちらの思いが通じる子、そうでない子、など一人一人の人生を背負っていく重さを感じた」

→②「自分にいろいろな引き出しがある方がよいので、様々な経験をしておくことよいと思います。」

(海外旅行、バイト、趣味、失敗経験) (女・臨有 28歳)

- ①「教科以外の仕事が多すぎる。学校は閉鎖的な空間である。しかし、教員間のチームワークや風通しの良さが一番大切だと感じた」

→②「ボランティアや教育実習では見られなかった、行事の計画や担当、分掌の仕事、委嘱研究や研修などの表面ではわからないこと、やらねばならないことが圧倒的に多い。しかし、「大変」「つらい」と思うことが自分の力になっていることは実感できる。そういった意味で深く学校を知ることが大事です。大学で学んだことは軸になります。学ぼうとする前向きな心を持ってください」 (女・臨有 24歳)

- ①「初任者になってから教科の勉強をしようとしても難しい。教員間の人間関係はあまりいいとは言えない。体調が悪くても休めない」

→②「生徒指導のキーワードは子供のために。面白いものやかわいい小道具を持っていると子供との会話が弾む。はじめは誰でも失敗するし、動けない。くよくよせずに子供と向き合えば子供はきっとわかってくれる。がんばれ！」 (男・臨有 28歳)

- ①「あまり変わらなかった」

→②「学校は古い体質であることを知っておくこと。その上で他の職業をアルバイトや異業種交流を通して広く知っておくこと。学校現場もこのままでいいというわけではなく、若手が勉強して教員も子供もより良い場所を感じられるよう変えていかなければならない。」

(女・臨有 25歳)

- ①「大学で学んだことは理想・基本的なルールであって、現場は全然違う。学校独自のルールがあったり、生徒の実態も学校によって様々でした。教育次週でも分からないです。しかし、学校の先生になるとその環境に慣れる。生徒40人を相手に学級経営や授業を展開しないといけないと覚悟しましたが、ギャップを感じています。」

→②「現場の先生に知り合いがいるまたは新たに作ると良い。何が大変なのか、その中身を知り、大変でもやりたいと思うならよいのではと思います。」 (女・臨有 歳未記入)

- ①「雑務の多さ、保護者対応の多さ」

→②「過酷な労働環境や不条理な様々な出来事に耐えられるだけの精神力」 (男・臨有 27歳)

- ①「無駄だと思う仕事が多々あるなと感じました。一番は子供に時間を使いたいのになんかできないくらい忙しいと感じました」

→②「中興の教員を目指す人はゆるぎない専門性を身に付けておくの良いと思います」

(男・臨有 26歳)

- ①「生徒指導が絶えないことが大きく異なる点かなと思います。そのために教材研究の時間が短くなったり、残業が長引いてしまうことがイメージと違うことです」

→②「中学校の教員を目指す人は、とにかく教材研究をしておくの良いと思います。」

(男・臨有 23歳)

- ①「大学時代は子供と楽しく授業をし、毎日が明るく充実した生活が送れると思っていました。実際は、毎日仕事に追われ、大人との人間関係の方が大変であり、休みのない仕事でした。」

→②「教育現場を見る機会があれば積極的に行ってください。大変さを理解したうえでなるべきだと思います。また、大学のうちから教材研究をして貯金にしておくとし心に余裕ができます。」 (女・臨有 24歳)

- ①「授業よりも生徒指導。自分のやりたいことが何もできない。」

→②「今後教員は必要性がなくなる可能性もある。その時のために視覚やいろいろな経験をした方がよい」  
(男・臨有 25歳)

- ・①「教育実習で行うことは本当に少ないことで、実際の仕事は教材研究の時間も取れないことのあるほど行事や出張に追われる。土日は部活があり、自分の時間というものはない。」  
→②「自分が本当にやりたいと思える仕事でなければ続けることの難しい仕事だと思う。学校ボランティアに参加したりして、いろいろな学校の様子を見た方がよいと思います。本当はどんな仕事なのか考えてから教職を目指した方がよいと思います。」  
(女・臨有 30歳)
- ・①「表面では見えない仕事だったり、教科によっては全校の前に立ち指導しないとイケないことのストレスが大きいとやってみて感じました。」  
→②「学習支援や行事、部活など学校によっても取り組み方が違うので多くの現場を見たり経験した方がよいと思います。」  
(女・臨有 29歳)

## (2) イメージギャップとメッセージからの考察

さて、「離職を真剣に考えた」初任者が教職に就く前後のイメージギャップとメッセージから今後の教職支援を考えるうえでどのようなヒントを得ることができるだろうか。

まず小学校、中学校共に初任者のイメージギャップとして、多忙な勤務実態に関する記述が目立つ。小学校ではほぼ全員（中学校では約半数）が初任者であっても担任を任せられることから、教科指導だけでなく、学級経営、生活、生徒指導そして保護者対応と責任の重い校務分掌を初任者にもかかわらず遂行していかなければならない。授業準備だけでなく生徒理解、家庭連携、基本的な生活習慣の指導など、中学校では部活動顧問など目の回るような生活を送っていることが想像できる。さらに時間に追われた教育活動の中で、学力格差（低学力児童への対応）、いじめなどの児童生徒トラブル、家庭の教育力の低下といった各種の課題が教室に持ち込まれた場合、経験の乏しい初任者は心身ともに疲弊すると考えられる。

そもそも教職は経験の知見が大きく左右する職業である。経験を重ねれば重ねるほど、仕事の段取り、児童生徒の扱い、行事遂行手順など学校の教育活動の流れが身につくことになるので、要領を得た省エネの動きが可能になる。

しかし、例えば、臨時的任用経験のない学卒間もない初任者は昨日まで学生であった者であるが、次の日には教師というベテランと同じ土俵に立ち、同じ責任を求められる。学級担任を考えてみよう。小学校教諭10年のベテラン教員は入学式、始業式以後の学校行事や学年行事、学級経営などほぼ行事や学校教育活動の流れを読むことができる。一方、昨日まで学生であった初任者が教育実習を経ているとはいえ、新学期の学校行事や教育活動の流れまでを読むことができるだろうか。しかも、子供たちは待たなして同じ土俵に上ってくる。初任者教員の学級の子供たちが自分たちの担任は初任者だから我慢しよう、助けようとするだろうか。まさに、教職の最大の課題は初任者の時期をどう切り抜けるかにあるといっても過言ではない。

もちろん、現在、法令により整備された初任者研修システムでは、各学校の指導教員の配置や初任者指導教員（主に、退職校長、教頭、ベテラン教諭の再雇用）が配置され、きめ細かい指導と配慮がなされている。埼玉県の初任者の今年度の初任者研修報告においても、小学校、中学校共に、「所属校における、悩み事等の相談相手について（3人選択）」で拠点校指導教員を選択した初任者が全体で小学校57.6%（2位）、中学校42.9%（2位）である。

しかしながら、改めて、イメージギャップの記述から拾い出してみると

「仕事の内容が多すぎる。もっと子供や授業のことを考えることができると思っていた。…中略…時間にも厳しい」

「思っていた以上に様々な仕事があり、かつ、多忙で全然心の余裕がないまま日々を過ごすことになったこと」

「放課後にすべき仕事が多すぎる。学年お仕事や会議、研修、部会が毎日のように合って、初任者はさらに公開授業や研究授業の準備や協議会もあり、…中略…また、学年で足並みをそろえなくてはならないことが多くて、自分が学級でやりたいと思っていたことや掲示物など自由にできないこと」

と述べている。背景に、義務教育標準法に基づく小学校教員配置数や学習指導要領における授業時数など、国の教育制度に係る課題があることは否めないが、この課題については別な機会に議論することとしたい。

ここで考えてみたいことは、まず「離職を真剣に考えた」初任者も「離職を全く考えなかった」初任者も「教職への思い」では共に教職が多忙で加重であると回答している。にもかかわらず、離職意識の有無に分かれる要因は何だろうか、ということである。

併せて、注意しておきたいことは、4月の調査「初任者としてスタートする上で不安なこと、心配なこと」の上位3つは小中学校とも「教科指導」「学級経営」「保護者対応」である。そして、1年間の研修修了時の調査において、「苦勞している、悩んでいる」こととして、上位3つに上がったのは、小学校は「教科指導」「学級経営」「生徒指導」であり、中学校は「生徒指導」「部活動」「教科指導」に変化している。このことをどう考えればいいのか、ということである。

ここでヒントになるのは、先述した「離職を真剣に考えた」初任者のイメージギャップとメッセージである。

・①「授業以外の仕事が多く、教材研究に力を入れている余裕はありません。管理職からのパワハラ、セクハラも存在します。土日仕事です」→②「各教科によって指導案の形式は異なるので勉強しておくよと思います」

・①「子供がかわいい、好きということだけではやっていけない仕事だと思った。」→②「覚悟した方がよい。社会人になるのは大変」

・①「イメージよりもはるかに学力が低かったり、生徒指導の面で問題があったりと子どもにはいろいろな子がいること。また、病気休暇に入る先生がとても多いこと」→②「実習校等にボランティアで行かせていただき、卒業式等の行事に参加させてもらおうと、教育実習では学べないことが学べます。また、子供にいろいろな経験を話せるように、今ある時間でいろいろなことを体験するといいかと思います」

・①「教職に就ける程の教育を受けてきた人にとっては、中学校3年生でも信じられないくらい読み書きや一般的な知識を持っていないこと。(保護者も含めて)。また、保護者の意見が世のイメージのモンスターペアレントとは全く違うズレ方をしていた」→②「教員採用試験に受かること。臨時的任用教員は部活や教科指導についての長期的な見通しが立たない。基本的な日常生活を送るために必要な知識を教える手法を身に付けておくこと」

・①「(1) 保護者が子供と同じ目線で物事を考えているため、協力連携がしづらい(非常識な保護者が多い)(2) 人員が不足しすぎている。教材研究の時間がない。授業が片手間になっている。(3) 部活動の活動日が多すぎる。また、物事が部活動中心に考えられすぎている」→②「教

科について専門知識があるということは当然で、そのうえで子供に分かりやすく教えるという経験が必要。塾などのアルバイトはしておくといよい。同時に大学の授業はきちんと受ける」

以上のことから、初任者スタート時点での不安や心配である事項で1年間を経ても、苦勞し悩んでいる事項の上位が小中学校の初任者で共通なのは「教科指導」「生徒指導」である。加えて小学校の場合は多くの初任者が担任を持つことから「学級経営」が苦勞、悩みに大きく影響しているといえないだろうか。

さらに、これらの事項になかなか適応できていない場合に「離職」を考えはじめ、かつ、大きな要因となるのが、「教員同士の人間関係」だと考えられる。このことを端的に記述しているものがある。（「離職を真剣に考えたことがある者」から）

「児童や保護者対応が一番大変だと思っていたが、共に働く教員のコミュニケーションが一番大事だと感じる。職場の雰囲気がいいとつらいことも乗り越えられる」（女・臨有 32歳）

つまり、「教科指導」「生徒指導」「学級経営」といった視点を重視し、各種の講義・演習及び教育課題研究（卒業研究や論文等）においても、学校現場での教育実践の視点を省察した講義演習にできないかということである。例えば、〇〇〇学概説、〇〇指導論（法）といった講義や演習の中でも、これらの学びが「教科指導」の場面では…、「生徒指導」の対応の場面では…、「学級経営」を組み立てていく際には…、といった学校現場での視点を意識した学びの省察を各講義演習で加味できないかということである。〇〇〇学概説の講義で場合によっては研究者教員と教育実践者（実務家教員）とのティームティーチングの講義演習を積極的に取り入れることも考えられる。大学の理論的な学びに教育現場の多様な現実を加味していけたらと考える。

そこで、大学における教職支援策を考えてみると、

- (1) 実践的教科指導の充実…教科や教科教育の分野ではあるが、学校現場を意識した教員養成における授業実践を踏まえた教科指導のカリキュラム開発と実践的な教科指導方法をセットにした具体的な授業展開論や事例が学べないだろうか。
- (2) 実践的生徒指導の充実…学校現場の40人に及ぶ子供たちの教室空間では毎日様々な事象が起こる。これら様々な子供たちの行動や意識、価値観などを考慮した授業の展開に必要なスキルを学ぶ演習を用意できないだろうか。
- (3) 学級経営の充実…現場での実務経験やフィールドワーク研究を踏まえて、子供たちの発達段階に応じた学級集団の機能や課題を実践的に学ぶ機会を多く設定できないだろうか。
- (4) コミュニケーションスキル、アンガーマネジメント、ストレス耐性マネジメントなどを身に付けるために、学校社会で繰り広げられる様々な場面を想定した危機管理的マネジメントを学ぶ演習を設定できないだろうか。

## 8 おわりに

現在学校の教育現場では、小学校が2020年度、中学校が2021年度から新学習指導要領の全面実施を迎えようとしており、キーワードである「主体的、対話的で深い学び」の授業実践に備えて試行錯誤を繰り返している。小学校英語の新設、プログラミング教育の導入、教科横断的カリキュラムの開発と学校現場はさらに多忙化を余儀なくされるような状況に置かれているのではないだ



ろうか。一方で、働き方改革が叫ばれ、労務管理が一層厳しくなろうとしている。

このような学校現場に、埼玉県では毎年、1000人に近い新採用教員を採用している。冒頭に述べたような

「健康で、明るく、人間性豊かな教師」（子供をよく理解し、自らも学び続け、子どもとの間に温かい人間関係が築ける人）」

「教育に対する情熱と使命感を持つ教師（子供に対する愛情と教育者としての責任を持ち、常に子供の立場に立った指導ができる人）」

「幅広い教養と専門的な知識・技能を備えた教師（幅広い教養と専門的な知識・技能を備え、子供にとってわかりやすい指導ができる人）」

を採用するのではなく、採用後に育てていくしかない状況であることは明らかである。送り出す教員養成を担う大学はどのようなミッションで学生を育成すればいいのだろうか。本大学でも入学直後の教育学部の学生アンケートでは約8割以上の学生が教職を目指していると回答している。しかしながら実際には卒業時に教職に就くものは5割に満たない採用状況である。

40年近く前になるが1980年に埼玉県の公立中学校の教員として就職し、初任者の時期には離職ばかりを考えた日々だった小生だが、気が付けば教職、教育行政と38年間にわたって学校現場と付き合い、生まれ変わってもまた教師になりたいと考える毎日である。

離職に悩む初任者は他人ごとではない。ここを乗り越れば教職の魅力と堪能できる可能性は大きい。本学部の学生たちを前に、なんとか初任の期間を切り抜き、教職の醍醐味を味わってほしいと模索する日が続いている。

## 註

- (1) 同様に、平成31年度採用さいたま市立小中学校等教員採用選考試験実施要項には、さいたま市が求める教師像として、「豊かな人間性と社会性」「強い使命感と教育への情熱」「幅広い教養と実践的な専門性」を備えた常に学び続ける教師、が示されている。

表現の文言や順序に若干の違いはあるが、「豊かな人間性」「教育への使命感と情熱」「幅広い教養」「専門的知識や技能」「学び続ける姿勢」など共通したものが求められている。ちなみに、他の都道府県の採用選考試験実施要項における「求める教師像」を眺めてみても、同様に

- ・「教育者としての使命感、子どもに対する深い愛情、教科等に関する専門的知識等のほか、多様な資質・能力を持つ豊かな人間性や指導力ある人」（北海道）
- ・「1 教育に対する熱意と使命感をもつ教師 2 豊かな人間性と思いやりのある教師 3 子供のよさや可能性を引き出し伸ばすことができる教師 4 組織人としての責任感、協調性を有し、互いに高め合う教師」（東京都）
- ・「1 豊かな人間性 何より子どもが好きで、子どもと共感でき、子どもに積極的に心を開いていくことができる人。2 実践的な専門性 幅広い識見や主体的・自律的に教育活動に当たる姿勢など、専門的知識・技能に裏打ちされた指導力を備えた人。3 開かれた社会性 保護者や地域の人々と相互連携を深めながら、信頼関係を築き、学校教育を通して家庭や地域に働きかけ、その思いを受け入れていく人」（大阪府）
- ・「1 子どもが憧れる人間的魅力 2 子どもに対する広く深い愛情 3 教師としての強い使命感」（福岡県）  
といった文言が並ぶ。

- (2) 文部科学省中央教育審議会答申（平成17年10月26日）第2章（1）あるべき教師像の明示より

- ・人間は教育によってつくられると言われるが、その教育の成否は教師にかかっていると言っても過言ではない。国民が求める学校教育を実現するためには、子どもたちや保護者はもとより、広く社会から尊敬され、信頼される質の高い教師を養成・確保することが不可欠である。

・優れた教師の条件には様々な要素があるが、大きく集約すると次の3つの要素が重要である。

1. 教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子どもに対する愛情や責任感などである。また、教師は、変化の著しい社会や学校、子どもたちに適切に対応するため、常に学び続ける向上心を持つことも大切である。

2. 教育の専門家としての確かな力量

「教師は授業で勝負する」と言われるように、この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。この力量は、具体的には、子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級作りの力、学習指導・授業作りの力、教材解釈の力などからなるものと言える。

3. 総合的な人間力

教師には、子どもたちの人格形成に関わる者として、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また、教師は、他の教師や事務職員、栄養職員など、教職員全体と同僚として協力していくことが大切である。

(3) 新採用教員アンケート 2018.04.04

現在、埼玉大学教育学部教育実践総合センター、並びに教職大学院で教師教育などに従事しております。この度大学での教員養成に関わる学修や養成段階における研究の一助とさせていただきたいと考え、新任教員研修を修了される方々へのアンケートへのご協力をお願いする次第です。なお、ご協力いただいた個人が特定されるようなことはありません。ぜひよろしく申し上げます。

埼玉大学教育学部教育実践総合センター、教職大学院 教授 安原輝彦

◎ 以下のプロフィールについて○で囲み、( )には該当事項をご記入ください。

年齢・年齢	男 ・ 女 ( ) 歳
現在の所属校種	・小学校： ( ) 学年担任 特別支援学級担任 担任無 ・中学校： 教科 ( ) 担任： 有 無 ・養護教諭： 小学校 中学校 ・栄養教諭： 小学校 中学校 ・特別支援学校： 初等部 中等部 その他 ( )
採用前経験	臨時的任用経験の 有 ・ 無 他自治体教員経験の 有 ・ 無 社会人経験（一般企業・行政等）の 有 ・ 無
卒業・修了学部	教育学部 ・ 教育学部外 ( ) 部

1. あなたが教職に就こうと決断したのはいつですか。下記の中から選んでください。

( ) その他 ( )

A ~中学卒業	B ~高校卒業	C ~大学（教育実習前）
D 大学（教育実習後）~	E 大学卒業後（社会人からの転職を含む）	F その他

2. 教職を自分の仕事として選択した理由は何ですか。以下の中から最も強い理由を1つ選んでください。

( ) その他 ( )

A：子どもたちに教えたり、共に学ぶことが好き	B：公務員で生活も安定している	C：上司、部下といった組織的な縛りが弱く、自分のペースで仕事ができる	D：時代の人材を育成するという重要な仕事
------------------------	-----------------	------------------------------------	----------------------

だから E：恩師や素晴らしい先生との出会い F：家族親族の影響 G 特に理由はない（なんとなく） H：その他

3. 初任者として、これから教職スタートを開始するにあたって、不安なこと、自信の無いこと、心配なことについて、下記の中から、3つまで記号を記入ください。

( ) ( ) ( ) \*その他の場合 ( )

A教科指導（授業や教材研究） B生活・生徒指導 C学級経営 D特別活動 E校務分掌  
F部活動・クラブ活動 G児童生徒理解（子どもたちとの人間関係） H教員同士の人間関係  
I保護者対応 J自立した生活 Kその他

ありがとうございました。

(4)「新採用教員アンケート」

新採用教員アンケート

2019.01.29

この度大学での教員養成に関わる学修や養成段階における研究の一助とさせていただきたいと考え、新任教員研修を修了される方々へのアンケートへのご協力をお願いする次第です。なお、ご協力いただいた個人が特定されるようなことはありません。ぜひよろしくお願ひします。

埼玉大学教育学部教育実践総合センター、教職大学院 教授 安原輝彦

◎以下のプロフィールについて ( ) に年齢を記入し、記号を選択し○で囲んでください。

1. 年齢等( ) 歳 A：男 B：女 6か月以上の臨時的任用教員経験 C：有 D：無  
2. 現在の所属校種 A：小学校 B：中学校 C：特別支援学校 D：高等学校  
3. 職名 A：教諭 B：養護教諭 C：栄養教諭  
4. 所有免許(すべて) A：幼稚園 B：小学校 C：中学校 D：高校 E：特別支援学校  
F：養護教諭 G：栄養教諭

2. 下記の中から、当てはまるものを①、②の質問に対してそれぞれ記号を記入ください。

5. この1年間の教職生活で順調であると感じる項目を上位2つ選んでください。

( ) ( ) \*その他 (K) の場合 ( )

6. この1年間の教職生活で苦労している、悩んでいると感じる項目を上位2つ選んでください。

( ) ( ) \*その他 (K) の場合 ( )

A：教科指導（授業や教材研究） B：生活・生徒指導 C：学級経営 D：特別活動  
E：学校行事 F：部活動・クラブ活動 G：児童生徒理解（人間関係）  
H：教員同士の人間関係 I：地域連携 J：保護者対応 K：その他

3. 7. 採用から初任者研修修了までの間に、教職を離れる(離職)について考えたことがありましたか。(下記A～Dより1つ選んでください) 【 】

A：真剣に考えた B：時々考えた C：ほとんど無い D：全くない

8. (A又はBを選択した方) 離職せずに教職を継続することができた要因は何だと思いますか。

( )

9. (C又はDを選択した方) 離職について考えるまでには至らずにいた要因は何だと思いますか。

( )

4. 10. 大学時代に、下記の枠内に示す学校現場での体験（ボランティア等）で、教職に就いて役立つ体験だと思うものがあれば2つまで記号を記入してください。(体験の無い方はJを記入)

10 ( ) ( )

その他 ( )

11. 体験の有無にかかわらず、1年間の勤務経験を踏まえ、教職を目指す学生に、大学時代に薦めたい経験を上位2つまで記号を記入してください。 11 ( ) ( )

その他 ( )

A：学習支援や学習補助	B：特別支援教育や障害児のサポート	C：部活動の補助
D：学校行事の補助（運動会、遠足、旅行の補助）	E：研究授業等の授業参観	
F：学校の事務補助	G：研究調査活動	H：その他 ( ) J 体験なし

5. 初任者として、1年間の勤務を通じての教職という仕事についてあなたの思いをお答えください。(記号で)  
( A：強く思う B：まあ思う C：あまり思わない D：全く思わない )

12. 「やりがいを感じる仕事である。 ( )

13. 社会に貢献していると感じられる仕事である。 ( )

14. 子どもたちと接することに喜びや元気を感じられる仕事である。 ( )

15. 経済的には安定していると思われる仕事である。 ( )

16. 仕事量は過重で、かなり多忙な仕事である。 ( )

17. 自分なりのペースや方法など自分の裁量で行う範囲が比較的に多い仕事である。 ( )

18. 仕事の成果がデータや数字ではすぐに示すことができない仕事である。 ( )

19. 職場では教員同士のチームワークの有無がかなり影響する仕事である。 ( )

20. 保護者等との協力や連携の有無がかなり影響する仕事である。 ( )

21. 教職は自分に合っていると思われる仕事である。 ( )

22. 大学時代（民間企業等で教職に就く以前）に考えていた教員や学校のイメージと、実際に教員として勤務しての教員や学校の実態で大きく異なると感じることは何ですか。自由に記入してください。

- 
- 
23. 教職を目指す後輩となる大学生に、まもなく教職1年目を終える先輩として、大学時代にどんな学びや準備をすればよいのかをメッセージとして記入ください。
- 
- 

ありがとうございました。

#### 引用・参考文献

- (1) 「教員養成支援の手がかりを求めて」 埼玉大学紀要 教育学部 2018
- (2) 「小学校初任者教員の現場適応の困難性と教員養成課程で身に付けるべき教師力の意識に関する研究」 大前 暁政 京都文教大学 2015年度 心理社会的支援研究 第6集
- (3) 初任教員の研修ニーズに関する調査研究 佐藤 幸江 金沢星稜大学 人間科学研究 第11巻 第2号 2018. 2月
- (4) 「さぬきの若手教員の実態」 香川県教育委員会香川県教育センター 平成25年度研究成果報告書 H26年3月

- (5) 平成28年度文部科学省委託事業「総合的な教師力向上のための調査研究事業」初任者研修の抜本的な改革に関する研究 成果報告書 山口県教育委員会 平成29年3月
- (6) 「初任者研修実施についての一考察—初任者研修実施校校長の視点から—」群馬大学教育実践研究 第26号 2009
- (7) ※チャイルド・リサーチ・ネット (URL:<http://www.crn.or.jp>) とは1996年7月に、ベネッセコーポレーションの支援のもと、非営利目的の「子ども学研究所」としてインターネット上に設けられたサイバー研究所です。日本の教育・育児・保育に関する情報収集や発表をするとともに、専門家だけでなく誰でも参加できる討論の場「フォーラム」を設置し、そこではテーマに基づいた討論や情報交換、意見交換が行われています。(所長 小林登：国立小児病院名誉院長，東京大学名誉教授)

調査概要●大学生教師観調査 (有効回答数 405) 性別 男性181人 (44.7%) 女性224人 (55.3%) 学年1年130人 (32.1%) 2年60人 (14.8%) 3年97人 (24%) 4年113人 (27.9%) 学部 教育学部 259人 (64.3%) その他 144人 (35.7%) 学科 教育系 148人 (44.4%) その他 185人 (55.6%) 実習経験 有 163人 (40.9%) 無 236人 (59.1%) 教職志望 教職志望 140人 (36.6%) 教職非志望 242人 (63.4%) 採用試験 受験予定 115人 (80.4%) 予定なし 12人 (8.4%) 未定 16人 (11.2%) 調査校 国立大学 3校，私立大学 2校●個別アンケート 実施期間 2000年12月～2001年2月 協力者 学生 11名 教職経験者 5名●大学生の座談会 実施日 2000年9月 協力者 国立大学 (教員養成系大学) の大学生 4名

- (8) 「大学生の教育観・教職観の形成過程に関する追跡調査研究 (3) 2010年調査と1999年調査・2008年調査との比較から

前田一男・宮下佳子・佐藤良・油井原均・長谷川慶子・大島宏 『立教大学教育学科研究年報』第55号 2012年3月20日

なお、この研究については以下の研究論文をベースに継続的に行われている。

○前田一男・大島宏ほか「大学生の教育観・教職観の形成過程に関する追跡調査研究—1995年調査と2006年調査との比較から—」『立教大学教育学科研究年報』第51号 2008年3月10日

○前田一男・大島宏ほか「大学生の教育観・教職観の形成過程に関する追跡調査研究 (2) —2008年調査と1997年調査・2006年調査との比較から—」『立教大学教育学科研究年報』第53号 2010年3月20日

(2019年3月29日提出)

(2019年4月19日受理)